

実施報告書

HT26061

【プログラム名】三味線は「わざ」のかたまりだ！さくろう伝統楽器の世界



開催日：平成26年11月22日(土)

実施機関：東京藝術大学(正木記念館)
(実施場所)

実施代表者：植村 幸生
(所属・職名) (音楽学部・教授)

受講生：小学生1名、中学生8名

関連URL：<http://www.geidai.ac.jp/labs/koi-zumi/exhibit2014n2.html>

【実施内容】

1. プログラムの目的

邦楽器(=日本の伝統楽器)作りには、驚くほどたくさんの「わざ」が詰まっています。楽器作りの職人さんは、長く厳しい修行を続けて、これらの「わざ」を代々受け継いできました。しかし、21世紀の現代社会では、昔と物の考えや感じ方が大きく変化し、昔どおりに楽器を作るには問題が多く、職人さんは深い悩みを抱えています。三味線は邦楽器の代表で、邦楽器は日本の伝統文化の大切な一部分です。伝統文化の受け継ぎ方を考えることは、物を作る人だけの課題ではありません。伝統文化のすそ野に生きる私たちも、もっと関心をもつべき問題ではないでしょうか。私たちグループはそう考え、三味線作りのプロセスを体感してもらうために、今回のプログラムを準備しました。

2. 研究成果をわかりやすく伝えるために工夫した点

職人さんが手間ひまをかけ、情熱をこめたといっても、できあがった楽器から、隠れた「わざ」は見えてきません。そこで、三味線づくりのプロセスを体感できるよう、以下のコーナーを順番に見聞きし、体験するプログラムをくみました。①三味線の素材や製作工程の実物を展示、②三味線本体と糸の製作工程をまとめた動画の上映、③職人さんによる三味線革張り実演とおはなし、④三味線の伴奏で長唄演奏を鑑賞、⑤参加者による三味線実習。

展示品には、胴の裏側に音響効果用に彫り込んだ「綾杉胴」や、三味線づくりで使う様々な工具類もふくめました。これらを動画でもとりあげたので、受講生のみなさんも強い印象を持ったようです。また職人さんの実演とお話コーナーでは、張る前の革をさわったり、張りおえた革の弾力をたしかめるなど、貴重な体験ができました。おわりに鑑賞と実習をつなげたのは、作る「わざ」を持つ人から、演奏する「わざ」を持つひとに、楽器が手渡され、自分も「わざのかたまり」である三味線を手に行っていることを、実感してもらいたいと考えたからです。

3. 当日のスケジュール

10:00-10:30	受付(東京藝術大学正木記念館前)
10:30-11:00	開講式(あいさつ、オリエンテーション、科研費の説明)
11:00-12:00	展示見学(実施分担者による説明)
12:00-13:00	昼食休憩(参加者が自己負担)
13:00-13:30	三味線製作者による胴革張りのデモンストレーション見学
13:30-14:00	クッキータイム
14:00-14:30	長唄三味線実演鑑賞(東京藝術大学正木記念館2階)
14:30-15:00	参加者による長唄三味線の体験実習
15:00-15:30	修了式(アンケート記入、修了証授与)
15:30	終了、解散



開校式



三味線づくりのビデオを見る



三味線の革張りを見学



長唄の鑑賞



長唄三味線の実習 01



長唄三味線の実習 02

4. 事務局との協力関係

今回は、本学初の「ひらめき☆ときめきサイエンス」プログラムでしたが、申請時からきめ細かいサポートを得て、順調に準備を進めることができました。具体的には、委託費の管理と支出報告書の確認、日本学術振興会への連絡調整と提出書類の確認・修正等、アルバイト学生や協力者への謝金支払い手続き、受講生の保険加入手続き、会場のAV機器設営があげられます。また実施当日は、写真撮影や本事業推進委員会委員への対応などを依頼し、実施者がプログラムの安全な遂行に専念できる環境を整えてもらいました。

5. 広報

①東京都台東区教育委員会のご協力を得て、区内公立中学高校に催しのビラと生徒への参加呼びかけを依頼する書面を郵送しました。②区内私立中学高校に①と同様書面を郵送しました。③公益財団法人台東区芸術文化財団にビラの配布を依頼しました。④「広報たいとう」10月20日号に広告を掲載しました。⑤台東区内の博物館、図書館、インフォメーションセンターにビラを持参し、利用者への周知を依頼しました。

6. 安全への配慮

①本学は比較的交通量の多い道路をはさみ、音楽学部と美術学部の校地が向かい合っています。今回は美術学部がわの建物で実施したので、プログラムが終了するまで、美術学部の構内から決して出ないように、オリエンテーションで注意しました。②トイレ休憩など学内の移動時には、はじめての場所で迷子にならないように、引率が必ずつき、全員で一斉に移動しました。

7. 今後の課題

一日に多くのプログラムを含めたので、参加者には少し負担が大きかったかも知れません。また三味線を実践する時間が30分程度と短めで、しかもまったくの初心者ばかりだったため、実践の時間をもっと長くしてほしい、という声に参加者や保護者からきかれました。次回は、2日間にプログラムを分けて、実際に楽器に親しむ時間をふやしたいと思います。また、三味線ではなく別の楽器をとりあげて、邦楽器の豊かなヴァリエーションを印象づける必要もあるでしょう。さらに、一方的に教えたり情報を提供するばかりではなく、児童や生徒の自発性を重視し、問題提起をめぐる参加者どうしで意見交換をうながす場をもうけたいと考えます。

【実施分担者】

小島 直文	音楽学部・准教授
薩摩 雅登	大学美術館・教授
尾高 暁子	音楽学部・講師
松村 智郁子	音楽学部・講師
久保 仁志	総合芸術アーカイブセンター・教育研究助手

【実施協力者】 5 名

【事務担当者】 社会連携課 森 友紀